

**論文** Traethawd Ymchil

カムライグ語の属格：構造・機能・関係

小池剛史

Genidol yn Gymraeg

Takeshi Koike

要旨 Crynodeb: Y mae'r draethawd hon yn trafod cystrawen, swyddogaeth y genidol yn Gymraeg, a pherthnasau semantig sydd rhwng yr enw genidol a'i ben. Y mae tair fath o gystrawen enidol; ôl-ddodiadol, rhagddodol, ac

arddodiadol. Y gystrawen ôl-ddodiadol yw'r mwyaf cyffredyn ohonynt. Mewn naill deip (e.e. *llyfr y dyn*) o'r gystrawen hon, y mae'r enw genidol yn annibynol o'i ben, ac yn y llall deip (e.e. *cadair freichiau*), ymuna'r dau enw fel uned gystrawennol. Goleddfu'r enw pen yw swyddogaeth y genidol ar y cyd. Ar ben hynny, fel ei swyddogaeth arbennig, gall yr enw genidol benderfynnu'i ben fel bannod, neu'i goleddfu yn ansoddeiriol. Ond gwelir enwau genidol yn gweithio fel goleddfiad enwol cyffredin hefyd. Gellir mynegi llawer math gwahanol o berthnasau semantig rhwng yr enw genidol a'i ben. Dadleir mai oherwydd fod y gystrawen ôl-ddodiadol wedi ymsefydlu ers y chweched ganrif pan y cyllir ffurfdroad enwol yn Gymraeg y cedwir swyddogaeth wreiddiol y genidol (h.y. goleddfu'r pen) dros y cyfnod hwn.

genidol, goleddfu, penderfynu, cystrawen

## 1. はじめに

カムライグ語には、しばしば「属格」(カ genidol ; 英 genitive) と呼ばれる次のような表現がある。

- [1] *llyfr y dyn* (llyfr 「本」 y (冠詞) dyn 「男」) 「その男の本」
- [2] *llyfr clawr caled* (clawr 「カバー」 caled 「固い」) 「ハードカバーの本」
- [3] *brawd y dyn* (brawd 「兄」または「弟」) 「その男の兄〔弟〕」
- [4] *llywodraeth gwlad* (llywodraeth 「政府」 gwlad 「国」) 「(ある) 国の政府」

これらの例は、すべて二つの名詞(句)から成る名詞句である。第二の名詞句(斜字体)が第一の名詞(下線部)に従属することによって、全体で一つの名詞句を構成している。カムライグ語史以前のブリティッシュ方言のように、名詞が格変化語尾を残していた時代には、上例の第二の名詞句のように他の名詞に従属する名詞は属格の格変化をしたことから、そのような格変化をしないカムライグ語の文法記述においても、「属格」という用語を使用しても良いとする立場がある<sup>1</sup>。本論はこの立場に立ち、二つの名詞(句)が従属関係によって一つの名詞句を構成している時に、従属している名詞(句)を「属格名詞」と呼び、それに対して主となる名詞(句)を「主要名詞」と呼ぶ(以下、用例中の属格名詞は斜字体、主要名詞は下線で示す。これらの用語を用いる際には、名詞句と名詞の区別をしない)。属格名詞が従属関係を標示するために採る構造を「属格構造」、また属格構造が持つ機能(従属関係を標示するということをも含めて)を「属格機能」、更に属格名詞と主要名詞の間にある様々な意味関係を「属格関係」と呼ぶ。本論の目的は、現代文章カムライグ語(以下、単に「カムライグ語」)の属格構造、属格機能、属格関係を明らかにすることである。

## 2. カムライグ語の属格構造：概説

カムライグ語の属格構造には、大別して (1) 後置構造、(2) 代名詞・前置構造、(3) 前置詞構造の三種類がある。

### (1) 後置構造

この構造は、属格名詞が主要名詞の直後に置かれるパターンで、もっとも主要な属格構造である。ii [1] [2] [3] [4] がその例である。これらの例では主要名詞はすべて一語から成っているが、二語以上から成る場合も、主要名詞全体の直後に属格名詞が置かれる。

[5] llyfr mawr y dyn (mawr 「大きな」) 「その男の大きな本」

[6] gwraig dal ac hardd y dyn (dal > tal 「背の高い」 ac (接続詞) 「～と～」  
hardd 「綺麗な」) 「その男の、背が高く綺麗な妻」

### (2) 代名詞・前置構造

属格名詞が代名詞の場合には、代名詞の「属格形」が主要名詞に対する後接辞としてその前に置かれる。通常、人称代名詞の「属格形」には強勢は置かれず、代名詞を強調する場合には、主要名詞の後に人称代名詞を繰り返し、強勢がくる。人称代名詞の「属格形」は後続の主要名詞に、人称・性によって異なる変異を起こす。単数では、1人称 *fy* の後では鼻変異、2人称 *dy* の後では軟変異、3人称男性 *ei* の後では軟変異、女性 *ei* の後では摩擦変異（母音の場合には *h*-音化）を起こす。複数では1人称 *ein*、3人称 *eu* の後で、主要名詞が母音で始まる時にのみ、その母音が *h*-音化する。

[7] 人称代名詞「属格形」＋主要名詞 (*car* 「車」; *arian* 「お金」)

(括弧内は強調のための繰り返しの代名詞)

単数

1人称 *fy n~~g~~har* (*i*)                      *fy arian* (*i*)

2人称 *dy gar* (*di*)                      *dy arian* (*di*)

3人称

(男) *ei gar* (*eŋ*)                      *ei arian* (*eŋ*)

(女) *ei char* (*hi*)                      *ei harian* (*hi*)

複数

1人称 *ein car* (*ni*)                      *ein harian* (*ni*)

2人称 *eich car* (*chwi*)                      *eich car* (*chwi*)

3人称 *eu car* (*hwy*)                      *eu harian* (*hwy*)

### (3) 前置詞構造

上述の二つの構造と対照的な構造として、前置詞構造がある。これは属格名詞を内に含む名詞句が不特定のモノを表す場合に用いる構造である (3. 1を

参照)。前置詞構造は、後置構造によって表される様々な属格関係（4. 1を参照）を分析的に表す構造であり、属格関係の種類によって、異なる前置詞（「～に」o「～から」gan「～による」など）が用いられる。

- [8] llyfr i'r dyn ('r = y (定冠詞)) 「その男の本 (の一冊)」 (所有関係)  
[9] brawd i'r dyn 「その男の (にとつての) 兄弟 (の一人)」 (人間関係)  
[10] un o'r dynion (un 「1」 dynion = dyn (複数形)) 「その男らの (内の) 一人」 (部分・全体関係)  
[11] ffrwythau o'r wlad (ffrwythau > ffrwyth 「果物、実り」 wlad < gwlad 「国」)  
「その国 (から) の果物」 (起源関係)  
[12] llyfr gan Dafydd (Dafydd (人名)) 「ダヴィーズ (による) の書いた本 (の一冊)」 (作成者の関係)

以上、三種類の属格構造を挙げたが、これらの中で最も主要な後置構造は、属格名詞と主要名詞の結び付きの度合いという観点から、更に二種類の構造に分類することが出来る。以下、2. 1 でその二種類の構造について述べる。

## 2. 1 二つの名詞の分離型と融合型

属格構造の中では、属格名詞が主要名詞に従属して一つの大きな名詞的なまとまりを形成しているが、二つの名詞がある程度の独立性を保って分離している場合（「分離型」と呼ぶ）と、二つの名詞が統語的に融合して密接なまとまりを成している場合（「融合型」と呼ぶ）とがある。

- 分離型 [13] cadair y dyn (cadair 「椅子」) 「その男の椅子」  
[14] cadair dyn 「(ある) 男の椅子」  
融合型 [15] llyfr clawr caled 「ハードカバーの本」  
[16] cadair freichiau (freichiau < breichiau < braich  
「腕」の複数形) 「肘掛椅子」 Cf. 英 arm-chair  
[17] tref Lundain (tref 「町」 Lundain < Llundain 「ロンドン」)  
「ロンドン (という) 町」

[13] [14] では、名詞句全体は、それぞれ、主要名詞 cadair と属格名詞 y dyn, dyn の二つから成っている。[15] [16] の表現は、それぞれ、主要名詞 llyfr, cadair と属格名詞 clawr caled, breichiau が融合して、「ハードカバーの本」「肘掛け椅子」という一つのまとまった概念を表す名詞である。更に [17] は、二つの名詞が結合して一つの地名として機能している同格表現である。この構造上の違いを次のように表すことが出来る。

- [13]' [cadair] [y dyn]  
[14]' [cadair][dyn]  
[15]' [llyfr clawr caled]

[16]' [*cadair freichiau*]

[17]' [*tref Llundain*]

このような二種類の構造上の違いを示すものとして、冠詞の位置がある。[14]'を特定のものを表す名詞句にしたものが [13]' である。その際に冠詞は属格名詞の前に置かれている。しかし [15]' [16]' は、それぞれ不特定の概念を表す表現であり、特定の概念を表すためには、名詞句全体の前に冠詞が置かれ、*y llyfr clawr caled, y gadair freichiau* (*gadair* < *cadair* : 女性単数名詞は冠詞の後で語頭子音が軟変異を起こす) となる。[13]' [14]' の場合のように、冠詞 *y* が *clawr caled, freichiau* の前に来ることはない。このことから、[15]' [16]' のような例においては、属格名詞と主要名詞が密接な統語的まとまりを形成していることが分かる。

融合型後置構造の特徴は、主要名詞が女性単数名詞の場合に、属格名詞の語頭子音に軟変異が生じることである(例 [16] [17] の *cadair, tref* は女性単数名詞で、*breichiau* の語頭子音が *b > f* (*[b] > [v]*) に、また *Llundain* の語頭子音が *ll > l* (*[l] > [l]*) に変異)。この原因は、この融合型属格名詞が形容詞的に機能しているからと説明出来る(3. 2 参照)。Morris-Jones, J. (1931) は、[16] のような例では、属格名詞が「名詞的特徴をまったく失い、単なる限定詞となり」「殆ど形容詞と全く同じように用いられる」と述べている<sup>iii</sup>。しかし、[17] *tref Llundain* 「ロンドン町」のような例になると、機能面からだけでは説明出来ない(*tref Llundain* の *Llundain* が「地名」であるため、名詞的特徴を失っているとは言い難い)。ケルト諸語の変異が、語と語が密接な統語上のまとまりを成す所に生じる<sup>iv</sup>という点を考えると、このタイプの属格構造では、主要名詞と属格名詞がそのような統語的まとまりを成しているとも見ることが出来るのである。これに対して分離型後置構造の例 [14] では、名詞句の中で属格名詞 *dyn* 「ある男(の)」と主要名詞 *cadair* 「椅子」が意味上も統語上もある程度独立しているために、属格名詞の語頭子音は女性単数名詞の後でも変異を起こさないのである。

以上、二種類の後置構造について述べた。この違いは、3. 1 と 3. 2 において扱う二つの属格機能とほぼ対応している。

### 3. カムライグ語の属格機能

属格の機能は、他の名詞への従属関係を標示することである。しかし属格構造を用いる目的という視点から考えると、属格の一般的機能は、主要名詞の「限定」(カ: *goleddfu* 英: *attribute*) である。名詞が指す対象となるモノには無限大の可能性がある。属格名詞は、主要名詞が指し得る無限大数のモノの中から、話者が話題とするべきモノに限定する働きをする。例えば、眼前に複数の

本があり、その中の一つに聞き手の注意を向けるためにその本の著者に言及し、例えば *llyfr John Davies* 「ジョン・デイヴィースの本」と言うことが出来る。あるいは、数ある本の種類（ハードカバー、ペーパーバック、古本、等）を特定するために、その本の表紙の種類に言及して *llyfr clawr called* のような表現を用いることも出来る。また、無数にある町の中からある特定の町（例えばロンドン）に限定する場合には、*tref Lundain* 「ロンドン（という）町」のような同格表現が用いられる。これら三つの例のどの場合にも、属格名詞は主要名詞を限定していると言うことが出来る。

上例の最初の二つについて、*llyfr John Davies* では「どの本」であるかを限定している。それに対し *llyfr clawr called* は「どんな(種類の)本」であるかを限定している。これら二つは、限定という属格機能の中でも特殊機能として特別に言及する必要がある。以下 3. 1、3. 2 にこれら二つの機能（それぞれ「決定詞的機能」「形容詞的機能」と呼ぶ）について詳述する。

### 3. 1 決定詞的機能

後置属格の第一の機能は、冠詞のような決定詞と同じ働きで、主要名詞の指示内容を特定化（＝決定する）ことである。既に述べたように、一つの名詞は無限大の指示対象を持つ。「決定詞的機能」を持つ属格名詞は、主要名詞が指し得る無限大の指示対象の中から、話者（文章語の場合は、「書き手」）が指示するモノを、それと何らかの関わりのある別のモノを経ることによって指し示す働きを持つ。例えば、上掲の *llyfr John Davies* では、主要名詞 *llyfr* が指し得る可能性のある本の中から、*John Davies* という人物と関わりを持つ（この場合は所有者、著者、その本の主題、或いは本の題名）「本」として特定している。属格名詞 *John Davies* は、主要名詞 *llyfr* の指示内容を話者（または書き手）が意図しているものに固定する言わば錨のような働き（‘a referential anchor’ Rosenbach 2002:226）をしている。属格名詞の働きは、*y llyfr* 「その本」の冠詞 *y* と同じである<sup>vi</sup>。

決定詞的機能を持つ属格名詞は、冠詞と同様に決定詞の語類に属しているために、主要名詞の後ろと前に、そのような属格名詞と冠詞が共起することはない。従って \**y llyfr John Davies* のような表現は文法的に正しくない。このことは、属格名詞を含む名詞句自体が属格名詞となり、他の主要名詞に従属する場合にも同じ規則が働き、冠詞は一番最後の属格名詞にしか付き得ない。

[18] *y llyfr* 「その本」 + *y (g)wraig* 「その妻」 + *y dyn* 「その人」

→ *llyfr gwraig y dyn* 「その人の妻の本」

（*gwraig* は *y dyn* に対して主要名詞であるが、*gwraig y dyn* 全体は

*llyfr* に対して属格名詞である)

決定詞的機能の属格名詞を伴う主要名詞はそれによって特定化されているので、そのような属格名詞を含む名詞句は、不特定名詞が要求されるような統語環境の中では用いられない。この場合には2. (3)で触れた前置詞構造が用いられる (Morris-Jones, J. 1931:20; Thomas 1996:327-8)。

例えば、*llyfr y dyn* に対して、「その男のとある本」のように、「その男」が所有するある本の不特定性を明確に表す場合には、主要名詞 *llyfr* の前に不定形容詞 *rhyw* (後続名詞の語頭子音に軟変異を起こす) が置かれ、更に属格構造が後置構造から前置詞構造 (前置詞 *i* が用いられる) に変わり、*rhyw llyfr i'r dyn* となる。

また、述部内で用いられる *yn* (「述部の *yn*」 '*yn traethiadol*' と呼ばれる。Thomas 1996:409) の後では、特定名詞 (句) を用いることが出来ないため、その場合でも前置詞構造が用いられる。

[19] *Y mae'r un yma yn llyfr i'r dyn.*

(*y* (動詞前虚辞：肯定文である事を標示) *mae'r* = *mae* 「～である」

(繫辞) + *r* (冠詞)、冠詞 + *un* 「ひとつ」 + *yma* 「この」)

「(このひとつ) これはその男の本です。」

この文では *yn* 以下は *yr un yma* 「このひとつ=これ」について叙述する部分であり、「これが (その男と所有関係にある) 本というカテゴリーに属する」という内容を表している。[19]の *yn* 以下は「(その男に所有される) 本というカテゴリー」を表し、特定の本を表している訳ではない。この環境では、主要名詞を文法的に特定化する後置構造を用いて所有関係を表すことが出来ず、前置詞構造が必要になる。

また、主要名詞が冠詞を伴わなければならない場合にも、後置構造の属格名詞は用いられず、前置詞構造が用いられる。例えば「その男の所有しているこの本」というように、「本」を所有者「その男の」と指示詞「この」の両方で特定する場合には、所有者関係は前置詞構造で表され、指示詞が冠詞と共に主要名詞の前後に置かれる。

[20] *y llyfr hwn i'r dyn* (*hwn* (指示詞)「この」で、指示詞は名詞の後に置かれ、名詞の前に冠詞が置かれる。)「その男のこの本」

### 3. 2 形容詞的機能

形容詞的機能は、Morris-Jones, J. (1931:22) の言葉を用いれば、属格名詞が名詞的特徴を失い形容詞的に機能していて、主要名詞が「どんなモノ」を指しているのかを特定する働きをする<sup>vii</sup>。

[21] *saer maen* (saer 「職人」 maen 「石」) 「石工」

[22] *cadair freichiau* 「肘掛け椅子」 (例[16]参照)

Morris-Jones, J. の説明にある、属格名詞が「名詞的特徴を失う」ことの意味は、属格名詞が、主要名詞の指しているモノとは独立した別のモノを表すという機能をもはや持たず、主要名詞が指すモノを特徴付ける何らかのモノに言及しているに過ぎないということである。[21] *saer maen* の属格名詞 *maen* は「石」という概念を表すが、それがどの石であるかどうかは問題ではない。属格名詞は、主要名詞 *saer* がどんな類の(=何を扱う)職人であるかを指定するだけである。また[22] *cadair freichiau* でも、属格名詞 *freichiau* は単にある種の椅子を特徴付ける部分として「肘掛」(=*breichiau*)に言及しており、それが「どの肘掛」が付いたものであるかは問題ではない<sup>viii</sup>。

形容詞的機能の属格名詞はモノを表すが、それがどのモノを指すかは全く問題にならないことから、この機能での属格名詞の前に冠詞が付くことは決してない。この点で、*llyfr y dyn* のような決定詞的機能の場合と大きく異なる。この機能での属格名詞を含む名詞句が特定名詞の場合には、名詞句全体の前に冠詞が置かれる ([21] [22])。この冠詞の位置は、形容詞を伴う名詞の場合と同様である ([23])。

[21]' *y saer maen* 「その石工」

[22]' *y gadair freichiau* 「その肘掛け椅子」 (*gadair* > *cadair* (女性単数名詞のため冠詞の後で語頭子音が軟変異))

[23] *y gadair fawr* 「その大きな椅子」 (*fawr* > *mawr* 「大きい」; この形容詞が修飾する名詞 *gadair* (> *cadair*) が女性単数名詞のため、語頭子音が軟変異)

また、このタイプの属格名詞はその働きが形容詞的であることから、主要名詞が女性単数名詞の場合 (例 [22])、属格名詞は形容詞と同じように、その語頭子音が軟変異を起こす。

### 3. 3 二つの属格機能と構造の対応

以上述べた二つの属格機能は、2. 1 で述べた二つの後置構造のタイプ、分離型と融合型とほぼ対応している。上述したように、決定詞的機能の属格名詞は主要名詞の指示内容を固定するための錨のような役目を果たしており、主要名詞とは独立した別のモノを指示している。従って分離型構造を採る。それに対し形容詞的機能の属格名詞は、それ自体独立してモノを指示するという名詞的特徴を失い、主要名詞が指示する概念を特徴付けているに過ぎず、主要名詞と融合して一つの名詞を構成している。従って融合型構造を採る。既に2. 1 で述べたように、形容詞的機能の属格名詞の語頭子音が、主要名詞が女性単数

名詞の場合に軟変異を起こすのは、二つの名詞の統語的融合ということが深く関わっている。また、*saer maen* のような表現を特定名詞にする場合に冠詞が全体の前に置かれる (*y saer maen*) のも、*saer maen* が一つの名詞としてまとまりを持っており、その間に冠詞を挿入することが出来ないからである。

属格構造と機能の対応を *y llyfr*, *llyfr*, *llyfr dyn*, *llyfr y dyn*, *saer maen*, *y saer maen* という用例を用いて図式化すると次のようになる。

- [24] [[y]<sub>決定詞</sub> [llyfr]<sub>名詞</sub>]]<sub>名詞句</sub> 「その本」  
[25] [[0]<sub>決定詞</sub> [llyfr]<sub>名詞</sub>]]<sub>名詞句</sub> 「(不特定の) 本」  
[26] [[llyfr]<sub>名詞</sub> [dyn]<sub>決定詞</sub>]]<sub>名詞句</sub> 「(不特定の) 男の本」  
[27] [[llyfr]<sub>名詞</sub> [y dyn]<sub>決定詞</sub>]]<sub>名詞句</sub> 「その男の本」  
[28] [[0]<sub>決定詞</sub> [saer maen]<sub>名詞</sub>]]<sub>名詞句</sub> 「(不特定の) 石工」  
[29] [[y]<sub>決定詞</sub> [saer maen]<sub>名詞</sub>]]<sub>名詞句</sub> 「その石工」

カムライグ語の名詞句構造を、最低限、決定詞と名詞から成るものと仮定する([24])。カムライグ語では不定冠詞がないので、無冠詞の名詞の場合には不定を表す 0 (ゼロ) 冠詞があるものとする([25])。[24][25]の場合には決定詞の位置は名詞の前である。[26][27]は決定詞的機能の属格名詞を含む名詞句の場合であるが、この場合には後置の属格名詞が決定詞の働きをするので、決定詞の位置は名詞の後ろである。[28][29]は形容詞的機能の属格名詞を含む名詞句である。この場合には属格名詞は主要名詞と融合して一つの名詞を構成し、決定詞の位置は、[24][25]の場合と同様に名詞 (主要名詞+属格名詞のまとまり) の前である。

[24]~[29] の分析は、現代文章カムライグ語において (決定詞的機能の) 属格名詞と冠詞が共起せず「相補分布」の関係にあることから、名詞句内には決定詞の位置は一つしかなく、[24] [25] [28] [29] の場合には名詞の前に、[26] [27] の場合には名詞の後にある、と考えた。しかし名詞句内の決定詞の位置が一つしかないという前提が正しいのかどうかは、まだ議論の余地が大いにある。また、現代文章カムライグ語文法では正しくないとされる \**y llyfr y dyn* のような表現が、地域的変種や異なった言語使用域のカムライグ語、さらには、中期カムライグ語などの過去のカムライグ語になかったのかどうかについても、さらに詳しく確認する余地がある。カムライグ語の名詞句構造については共時的、通時的立場から研究が必要である。<sup>ix</sup>

### 3. 4 「決定詞的」「形容詞的」機能以外の機能：限定機能<sup>x</sup>

以上、限定機能の中の特殊機能として、決定詞的機能と形容詞的機能の二つに言及し、それぞれに対応する構造について述べた。本稿の 3. の冒頭にあるように、属格の一般的機能は限定機能である。属格の例の中には、決定詞的機

能と持っていると思われるもの、形容詞的機能を持っていると思われるものがあるのだが、その他に、どちらの機能を果たしているとも言えず、単に限定機能を果たしているとすべきものもある。例えば大学の「カムライグ語学科」は *Adran y Gymraeg* (adran 「学科」 Gymraeg < Cymraeg 「カムライグ語」(女性名詞のため、冠詞 y の後で語頭子音が軟変異) のように分離型後置構造を用いることもあれば、また (Yr) *Adran Gymraeg* (adran は女性単数名詞なので、融合型の属格名詞 Cymraeg の語頭子音は軟変異を起こす) のように融合型後置構造を取ることもある。属格名詞は前者では冠詞付き、後者では冠詞なしであるが、カムライグ語では言語名は冠詞が付くことも付かないこともあり<sup>xii</sup>、それによって意味に差異があるのかも不明である。*Adran y Gymraeg* のような表現は、「どの学科」・「どんな学科」のいずれの問いに対する答えにも成り得る表現であり<sup>xiii</sup>、機能的に「決定詞的」「形容詞的」に分類することは出来ない。このような例は、単に限定機能を持つものと考えらるべきであろう。

3. 3 で機能と構造の対応に言及したが、分離型構造のものが常に決定詞的機能、融合型構造のものが常に形容詞的機能を持つということはない。2. 1 で見たように、*tref Lundain* のような同格表現では、属格名詞は固有名詞として名詞的特徴をしっかりと保っているために、形容詞的に機能しているとは言い難いが、構造的には融合型で、属格名詞の語頭子音は軟変異を起こしている。このような例は、属格名詞の語頭子音が軟変異する原因が、必ずしも属格名詞が形容詞的だからということではなく、主要名詞と属格名詞が結合して地名という一つのまとまりを形成していることが大きく関わっていることを示している<sup>xiii</sup>。

また、決定詞的機能の属格名詞は、冠詞など他の決定詞と共起することは出来ないことは既に述べたが、主要名詞が冠詞を伴わなければならない場合には、例 [20] のように前置詞構造を取るだけでなく、融合型の構造を採ることがある。

[30] *i frenin y gogoniant ddod i mewn* (i (前置詞) 「～へ」 freninn < brenin 「王」 gogoniant 「栄光」 ddod > dod 「来る」 i mewn 「中へ」) 「栄光の王が入ってくる」(詩篇 24 : 7)

[31] *Pwy yw'r brenin gogoniant hwn?* (pwy (疑問詞) 「誰？」 hwn (指示詞) 「この」) 「この栄光の王は誰か？」(詩篇 24 : 8) <sup>xiv</sup>

[30] [31]には「栄光の王」という表現が含まれている。[30] では分離型の属格構造が使われている ([frenin] [y gogoniant])。[31] では主要名詞 brenin が指示代名詞 hwn によって限定されているために、その前に冠詞 'r が置かれている。冠詞を伴った主要名詞 y brenin hwn 「この王」に対し分離型・決定詞

的機能の属格名詞が用いられることはなく、融合型の属格構造が用いられている (*y [brenin gogoniant] hwn*) が、この属格名詞 *gogoniant* が形容詞的機能を持っているとは考えられない。これらの例では、分離型後置構造の場合には主要名詞が決定されるために冠詞と共起出来ないという構造的な理由から、融合型後置構造が使われていると考えた方がよい。ただし、このような用例は、「カムライグ語」を表す表現 (*Cymraeg, Y Gymraeg*) の場合と同様、冠詞付き名詞句 *y gogoniant* と無冠詞の *gogoniant* の意味上・機能上の違いも関係しており、カムライグ語の冠詞の用法も考慮に入れながら研究する必要がある。

以上の例から、属格名詞の果たす一般的機能は限定機能であり、その中には特殊機能として決定詞的機能、形容詞的機能を持つものもある、と言うことが出来る。属格の用例の中には、明らかに決定詞的なもの、明らかに形容詞的なものがあるが、その中間には、どちらの機能とも言えず、単に「限定機能」を持つと言うべきものがある。構造と機能の対応について、明らかに決定詞的機能の属格は分離型構造、明らかに形容詞的機能のものは融合型構造を採る傾向があるが、単に限定機能を持つとすべき属格については、そのような構造と機能の対応はあまり見られない。

#### 4. カムライグ語の属格関係

属格名詞と主要名詞の間の意味関係について、カムライグ語では、印欧祖語の属格が持つ二つの名詞間に起こり得る、ありとあらゆる意味関係を表すという機能が比較的よく残されている、との発言もある<sup>xv</sup>。以下に見るように、確かに、カムライグ語属格構造は極めて多様な意味関係を表すことが出来るが、3. で述べた属格構造の本来の目的、つまり主要名詞が指すモノを限定するという目的によって、自ずと主要名詞に対する属格名詞の種類は限られる。例えば、*llyfr y dyn* のように「所有者」によって「被所有物」を限定することはあっても、*\*dyn y llyfr* (「その本を持った男」という意味で)「その本の男」のように、「被所有物」によって「所有者」を限定することは極めて稀である<sup>xvi</sup>。本というものは一般的な被所有物であって、誰でも持っている物であり、その所有者を限定する力が比較弱いためである。それに対して *bardd y gadair* (bardd 「詩人」 y gadair 「(アイステズヴォドでの詩のコンテストで優勝者に与えられる) 椅子」)「(アイステズヴォドの) 椅子の詩人」のような表現では、属格関係は *\*dyn y llyfr* の場合と同様、被所有物と所有者の関係であるが、この椅子が特別な人物にしか与えられないので、y gadair が属格名詞として限定機能を果たすことが出来るのである。以上の理由から、カムライグ語の属格構造に見られる二つの名詞間の意味関係は、Morris-Jones, J. が示唆しているよ

うな無制限なものではなく、属格の限定機能という特徴によって制限されている。

属格全体を分離型後置構造を取るものと融合型後置構造を取るものに分けて、カムライグ語属格構造に見られる属格関係を以下に纏める。

#### 4. 1 分離型後置構造に見られる属格関係

分離型後置構造を取る属格名詞と主要名詞の関係は、大きく分けて「所有関係」「対象関係」「特徴関係」の三つに分類出来る。

(A) 所有関係：典型的な例は、主要名詞＋属格名詞の関係が「被所有物」（無生物）＋「所有者」（人物）のものであるが、ここに含まれる例では、主要名詞の表す概念に対し、属格名詞はより「大きい」概念、例えば（被所有物に対する）所有者、（部分に対する）全体、（何らかの対象に対する）基準、起源、（動作に対するその）主体を表す。主要名詞＋属格名詞の関係には、(1)「被所有物＋所有者」の他、(2)「部分＋全体」、(3)「人＋人」（主要名詞は、属格名詞の表す人物を基準として限定される人物を表す）、(4)「作品＋作成者」、(5)「人・物＋起源・出身地」、そして(6)「動作＋主体（主語）」などがある。

(1) 被所有物＋所有者

[32] *llyfr y dyn* 「その男の本」

[33] *gwroldeb Dafydd* (*gwroldeb* 「勇気」) 「ダヴィーズの勇気」

[34] *cariad y fam* (*cariad* 「愛」 *fam* > *mam* 「母」)

「母の（＝が持つ、が与える）愛」

((6)「動作＋主体」の関係とも関わっている)

(2) 部分＋全体

[35] *dŵr y môr* (*dŵr* 「水」 *môr* 「海」) 「海の水」

[36] *geiriau'r iaith* (*geiriau* < *gair* 「語（複数）」 *iaith* 「言語」)

「その言語の単語」

[37] *braich y dyn* (*braich* 「腕」) 「その男の腕」

(3) 人＋人

[38] *brawd y dyn* 「その男の兄（弟）」

[39] *brenin y wlad* (*brenin* 「王」 *wlad* < *gwlad* 「(被統治者の集団として) 国」) 「その国の王」

(4) 作品＋作成者

[40] *nofelau Islwyn Ffowc Elis* (*nofelau* < *nofel* 「小説」(複数)

「イスルイン・フォウク・エリスの小説」

[41] *Salmu Dafydd* (*salmu* < *salm* 「詩篇」) 「ダヴィーズの(書いた)詩篇」即ち、「ダビデの詩篇」

即ち、「ダビデの詩篇」

(5) 人・物+その起源・出身地

[42] *ffwrythau'r ddaear* (ffwrythau < ffrwyth 「実り」 ddaerar < daear 「大地」) 「大地の実り」

[43] *sŵn y gwynt* (sŵn 「音」 gwynt 「風」) 「風の音」

[44] *Dafydd y Garreg Wen* (garreg < carrreg 「岩」 (女性名詞) wen < gwen 「白い」 (形容詞女性形))

「白岩のダヴィーズ」(18世紀のハープ奏者の異名)

(6) 動作+主体(主語)

[45] *dinistr Duw* (dinistr 「破壊」 Duw 「神」) 「神による破壊」

[46] *dyfodiad y dyn* (dyfodiad 「到着」) 「その男の到着」

[47] *sgrws y wraig* (sgrws 「会話」 wraig < gwraig) 「その妻の会話」

[48] *gair y doethion* (gair 「言葉」 doethion 「賢者達」)

「賢者達の(言った)言葉」

[49] *gair Duw* (Duw 「神」) 「神の(語った)言葉」

(B) 対象関係：主要名詞は動作、或いは動作の結果作られたものを表し、属格名詞はその動作の対象を表す。

(1) 動作+対象

[50] *dinistr Sodom a Gomora* 「ソドムとゴモラの破壊」

[51] *ofn yr Arglwydd* (ofn 「畏れ」 yr Arglwydd 「主」) 「主への畏れ」

[52] *disgrifiad y ffaith* (disgrifiad 「記述」 ffaith 「事実」)

「その事実の記述」

(2) 作品+対象

[53] *llun y dyn* (llun 「写真」) 「その男の(=を撮った)写真」

[54] *stori'r brenin* (stori 「物語」 brenin 「王」)

「その王(について)の物語」

[55] *dameg y Deg Geneth* (dameg 「例え話」 deg 「10」 Geneth 「乙女」) 「10人の乙女ら(についての)の例え話」<sup>xvii</sup>

(C) 特徴関係：これは(A)の場合とは対照的に主要名詞の方が属格名詞より「大きな」概念を表す。属格名詞は主要名詞の指示内容に含まれ、それを特徴付ける要素を表す。典型的な例では、(1)属格名詞は形容詞から派生した抽象名詞が用いられるのであるが、その他、属格名詞が、(2)(主要名詞のあらわす人物の)獲得物を表したり、(3)(主要名詞の表す「時」、「場所」等の特徴付ける)部分的要素を表すものもある。

(1) 属格名詞=抽象名詞

[56] *llwyfrau cyfiawnder* (llwybrau 「道」(複数) cyfiawnder 「正義」) 「義の道」(Salm 23:3<sup>xviii</sup>) (gw. cyfiawn (形容詞) 「正しい」)

(2) 属格名詞=獲得物

[57] *bardd y gadair* 「(アイステツズヴオドで最優秀詩人に与えられる) 椅子を与えられた詩人」

[58] *brenin y gogoniant* 「栄光の王」

(3) 属格名詞=主要名詞の表すモノ(時間、場所等)を特徴付ける要素

[59] *dydd y barn* (dydd 「日」 barn 「審判」) 「審判の日」

[60] *maes y gad* (maes 「場所」 gad < cad 「戦い」) 「戦場」

[61] *Adran y Gymraeg* 「カムライグ語学科」

特徴関係のカテゴリーは、4. 2の中で述べる「形容詞的機能のもの」と重なるところが多い。次の例では、属格名詞は名詞句として独立しており分離型構造のものと分析すべきであるが、属格名詞の機能が形容詞的であるためか、語頭子音が軟変異を起こしている。

[62] *chwi bobl ddau feddwl* (chwi (人称代名詞 2人称複数) bobl > pobl 「人々」(前の人称代名詞との同格関係のために、語頭子音が軟音化) ddau > dau 「二つの」 feddwl > meddwl 「心」(数詞 (d)dau は後続する語の語頭子音に軟変異を起こす) 「あなた達、二つ心の人々よ」(ヤコブ 4:8) <sup>xix</sup>

#### 4. 2 融合型後置構造に見られる属格関係

融合型後置構造は、「形容詞的機能のもの」、「同格関係」、「分量関係」の三つに分類出来る。

(A) 形容詞的機能：融合型後置構造における属格名詞は、主要名詞に対し形容詞的に機能するものが多い。特に、主要名詞の指すモノを種別化出来る名詞であれば、どのようなものでも形容詞的属格名詞として機能することが出来る。以下に示すように、属格名詞の表すモノには、(1)部分、(2)道具、(3)目的、(4)時間、(5)場所、(6)材料等がある。

(1) 部分：属格名詞は、主要名詞の指すモノを特徴付ける部分を表す。

[63] *cadair freichiau* 「肘掛椅子」

[64] *gardd flodau* (gardd 「庭、畑」(女性名詞) flodau < blodau 「花」(複数)) 「花園」

[65] *car pedair olwyn* (car 「車」 pedair 「4」 olwyn 「車輪」) 「四輪車」

(2) 道具：属格名詞は、主要名詞の表すモノに関わる道具を表す。

[66] *melin wynt* (melin 「碾臼」(女性名詞) wynt < gwynt 「風」)

「(粉を引くための) 風車」

[67] cerdd dant (cerdd 「音楽」(女性名詞) dant < tant 「弦」  
「弦音楽」)

(3) 目的：属格名詞は、主要名詞の表すモノが使われる目的を表す。

[68] llwy fwrdd (llwy 「匙」(女性名詞) fwrdd < bwrdd 「卓」  
「テーブル・スプーン」)

[69] melin flawd (flawd < blawd 「小麦粉」)「小麦粉を作るための碾臼」

(4) 時間：属格名詞は、主要名詞の表すモノが活動している、または見られる時間を表す。

[70] ysgol nos (ysgol 「学校」 nos 「夜」)「夜間学校」

[71] seren ddydd (seren 「星」(女性名詞) ddydd > dydd 「日」  
「明けの明星」 「太陽」)

(5) 場所：属格名詞は、主要名詞の表すモノが活動している、または見られる場所を表す。

[72] seren fôr (seren 「星」 fôr < môr 「海」)「海の星」 = 「ひとで」

[73] twrch daear (twrch 「猪」 daear 「大地」)「もぐら」

(6) 材料：属格名詞は、主要名詞の表すモノの材料を表す。

[74] cadair dderw (dderw < derw 「櫟の木」)「櫟の椅子」

[75] het wellt (het 「帽子」(女性名詞) wellt < gwellt 「藁」  
「麦藁帽子」)

(B) 同格関係：主要名詞が普通名詞で、属格名詞はその具体的な例を表す。

[76] tref Lundain 「ロンドン町」

[77] Afon Ddyfrdwy (afon 「川」)「ダブルドゥイ川」

(C) 分量関係：属格名詞は dŵr 「水」、glo 「石炭」などの物質名詞や、blodau (< blodyn 「花」) などの複数名詞で、主要名詞はそれらの物質の分量を測るための単位を表す。この関係はいわゆる「部分属格」(カ rhannol 英 partitive) と呼ばれる関係である。分離型後置構造 (A) (2) 「部分+全体」関係の例 (特に [35] dŵr y môr 「海の水」) と意味が非常に近いが、同じ部分+全体の関係でも、属格名詞が物質名詞(非可算名詞)または複数名詞の場合には、融合型後置構造を採る<sup>xx</sup>。ただし、融合型構造を採るのは、名詞句全体が冠詞などで特定されている場合のみ (例 [78] [79]) で、名詞句全体が不特定の場合には、前置詞構造を用いる (例 [80] [81] : Morris-Jones, J. 1931:163 (ii))。

[78] y dunnell lo (dunnell < tunnel 「トン」 lo < glo 「石炭」)

「その石炭1トン」

[79] *y pwys gaws* (pwys 「ポンド(重さの単位)」 gaws > caws 「チーズ」) 「そのチーズ1ポンド」

[80] *tunnel o lo* (o (前置詞) lo > glo (前置詞 o の後で軟変異))  
「石炭1トン」

[81] *un ohonynt (hwy)* (un 「1」 ohonynt (前置詞 o の三人称単数形)) 「彼らの1人、それらの一つ」

#### 4. 3 属格関係の多様性とカムライグ語史

4. 1、4. 2に示したように、カムライグ語の属格構造内の主要名詞と属格名詞の意味関係は多種多様である。4. の冒頭の注で、Morris-Jones の「カムライグ語属格は、他の印欧諸語と比べ、印欧祖語の「本来の属格機能」をよく残している」という説明を引用した。カムライグ語が古い属格機能を保存している背景には、主要名詞+属格名詞という後置構造が、カムライグ語史が始まって以来ほとんど変化していないということがあると考えられる。

カムライグ語の歴史は、ブリティッシュ語<sup>xxi</sup>にあったとされる名詞の様々な語形変化語尾が、末尾第二音節に強勢が置かれるという特徴のために脱落し、語形変化語尾が担っていた様々な統語的機能が、前置詞や語順によって担われるようになった時から始まるとされる<sup>xxii</sup>。ブリティッシュ語の、まだ格変化を残した状態の時には主要名詞と属格名詞の語順は〔主〕+〔属〕でも〔属〕+〔主〕でもどちらでも名詞句全体の意味解釈に問題はなかったのだが、格変化語尾が脱落した時に、その言語は〔主〕+〔属〕か〔属〕+〔主〕のいずれかを選択しなければならず、カムライグ語の場合には前者〔主〕+〔属〕となった(但し、〔属〕+〔主〕の語順がブリティッシュ語からカムライグ語への移行期に完全に無くなったわけではなく、その例がいくつか6世紀の詩に残されている<sup>xxiii</sup>)。従って、カムライグ語では、その歴史が始まる6世紀中頃から、主要な属格構造は後置構造だったわけである。Morris-Jones(1931)は、「本来の属格機能」として、名詞と名詞の間に起こり得る、ありとあらゆる関係を表すことと述べている(この説明の問題点は4. の冒頭で指摘)が、そのような機能が、カムライグ語では比較的早い時代における語順の固定によって、現代カムライグ語に至るまで保たれていると考えられる。

#### 5. 結論

以上、現代文章カムライグ語における属格名詞を伴う表現を、構造、機能、関係の面から記述した。主要な属格構造である後置構造を中心に扱い、この下位区分として分離型及び融合型後置構造に分類した。属格の一般的機能は主要名詞の限定であるが、その中には特殊機能として「決定詞的機能」や「形容詞

的機能」を持つものもあり、それらの機能を果たす属格は、それぞれ分離型、融合型の構造を採る傾向がある。属格関係については、カムライグ語では主要名詞と属格名詞の間には極めて多種多様な関係があり得ることを示したが、それは属格の限定機能という特徴によって制限されていることにも言及した。また属格関係の多様性は、カムライグ語史を通じて「主要名詞＋属格名詞」という後置構造に変化がなかったという事実と関連している点を指摘した。

本論の中で、現代カムライグ語属格の様相が、緩音現象、冠詞の用法、名詞句構造、またカムライグ語史など、カムライグ語の他の文法分野と深く関わっていることも指摘した。今後、これら他の分野とも関連させた属格研究が期待される。

<sup>i</sup> Rowlands (1977/78) はこのような立場から 'genidol' という用語を使用している: "Rhaid cofio, wrth gwrs, mai iaith analytig yw'r Gymraeg i gryn raddau, ac yn sicr felly cyn belled ag y mae cyflyrau enwau yn y cwestiwn: ni ffurfdroir enw i fynegi gwahanol gyflyrau fel y mae iaith synthetig fel Lladin yn ei wneud. Gellir dal wrth gwrs mai afreal felly sôn am y genidol yn Gymraeg; ond pan fo greddf ieithyddol yn peri i siaradwyr deimlo fod un enw yn dibynnu ar enw arall cydosodedig ac nad mater o gyfosod ydyw, yna y mae'r term genidol yn ddefnyddiol, ac y mae'n debyg o fod yn gywir hefyd yn yr ystyr fod y gair dibynnol wedi bod yn y cyflwr genidol ffurfdroadol yn y cyfnod Brythonig." Rowlands (1977/78:292) 「当然覚えておくべきことであるが、カムライグ語は極めて分析的な言語であり、名詞の格に関して特にそうである。ラテン語のような総合的言語とは異なり、名詞は様々な格変化を表すために屈折変化をしないのである。従って、カムライグ語における属格を話題にするのは非現実的であると言うことも出来る。しかし話者が言語的直感で、ある名詞が、それと並列している他の名詞に従属しているという感覚を持ち、それが同格関係でないのであれば、属格というこの用語は有効である。また従属している名詞が、ブラソニック語時代には属格の格変化をしていたという意味でも、(この用語を用いることは) 正しいと言えるのではないか。」これとは反対の立場については Thomas (1996:322 [b]) を参照。

<sup>ii</sup> カムリ中部地方 (Canolbarth) では *heddiw'r bore* 「今日の朝」 *heddiw'r prynhawn* 「今日の午後」 *fory'r bore* 「明日の朝」のような表現があり、ここでは属格名詞 *heddiw* 「今日」、*fory* 「明日」が、主要名詞 *'r bore* 「その朝」 *'r prynhawn* 「その午後」の前に現れる。しかし、文章カムライグ語では後置構造であり、それぞれ *bore heddiw*, *prynhawn heddiw*, *bore fory* となる (Cf. BBC 27ain Ionawr 2007)。

<sup>iii</sup> 'A noun in the genitive case may lose its nominal character entirely, and become a mere attribute.... These attributive genitives are used almost exactly like adjectives' Morris-Jones, J. (1931:22)

<sup>iv</sup> "Not only are the actual phonological manifestations of the Celtic mutations highly comparable ..., but there is a striking coincidence of

grammatical triggers for the various mutations. According to the standard account, all these derive from instances where close syntactic units gave rise to phonological sandhi which later became grammaticalized as exponents of that syntagm.” Ball & Fife (1992:10)

v この説明については Langacker による英語の所有格構造分析‘Reference Point Analysis’「参照点分析」(Langacker (1991:170)) を参照のこと。

vi *Llyfr John Davies* という表現が特定の本を表すという議論は、その表現が使用される状況において考えなければならない。John Davies はもちろん一冊以上の本を持っているであろうから、厳密に言えば「ジョン・デイビスの所有する本」という表現によって一冊の本が特定される訳ではない。しかし、話し手と聞き手の目の前に一冊の本があり、それが第三者の本であることが分かっている時に “Llyfr pwy yw hwn?” 「これは誰の本ですか？」と一方が聞いて他方が “Llyfr John Davies yw hwn.” 「これはジョン・デイビスの本です」と答えたとする。この表現においては、ジョン・デイビスが持っているであろう他の本は全く問題にならず、その場面では一つ特定の本を指している。

vii Morris-Jones, J. (1931:22, § 14 (i)) : 引用文は注 3 を参照。

viii もし「この肘掛のついた椅子」ということを表すためには、属格構造を用いずに前置詞構造を用いて *cadair â'r freichiau hyn* (*hyn* (指示詞) 複数形) のように言わなければならない。

ix Morris-Jones, B. (1993:189) は、*ma'r car plismon yn dod yn ôl heno.* (*car* 「車」 *plismon* 「警官」 *dod yn ôl* 「戻る」 *heno* 「今夜」) 「その警官の車は今夜戻ってくる」の中の '*r car y plismon* のように、主要名詞は冠詞と属格名詞を前後に伴った例をカムライグ語話者が話しているのを聞いたことがあると述べている。また Evans (1960:14) も、中期カムライグ語で、*meibion y brenin y diodeifeint* (*meibion* 「息子達」 *diodeifeint* 「苦しみ」) 「苦しみの王の息子達」のような例があることを報告している。このことから、Morris-Jones, B. は、上掲の '*r car y plismon* のような例は言い間違えには違いないが、意味論的に主要名詞が特定のものを表すから生じたものではないか、と示唆している。即ち、**'It is not unreasonable to think that the initial article has been produced because the independent nun is definite. It can still be seen as a performance error but one which is motivated by semantic factors.'** Morris-Jones, B. (1993:189)。

x 本セクションは、大阪言語研究会 (2007年3月26日於 アウリーナ大阪) で本論の内容を発表した時に多くの先生方からご意見を頂きました。特に米田富彦先生 (同志社大学)、下郡健志先生 (名古屋大学大学院助手)、神山孝夫先生 (大阪外国語大学) から、属格名詞に関する貴重なご提案を賜り、参考にさせていただき、3. 4 として追加した。ここに上記三人の先生方に深く感謝いたします。

xi 'Elfen ddewisol yw'r bannod wrth gyfeirio at ieithoedd' (Thomas 1996: 186). 「言語を指す場合の冠詞は随意的要素である。」

xiii 例えば、(1) *Pa adran a achosodd y problem?* 「何学科 (どの学科) がその間

題を起こしたのですか？」に対しても、(2)Pa adran yw hon? 「これは何学科 (どんな学科) ですか？」に対しても、Adran y Gymraeg は答えになる。但し融合型が用いられる場合には、(1) に対しては Yr Adran Gymraeg (特定)、(2) に対しては Adran Gymraeg (不特定) が用いられる。

xiii 属格名詞の語頭子音軟変異を伴う同格表現は現代文章カムライグ語では廃れつつあるとの指摘がある。Thomas (1996) によれば、1974年以前の行政区画では *Sir Benfro*, *Sir Ddinbych* (Sir「州」は女性単数名詞) のように属格名詞が軟変異を起こした州名が使われていたが、それ以降の行政区画では *Sir Powys*, *Sir Dyfed* のように軟変異のない州名が使われている。また河川名は現在は *Afon Dyfrdwy*, *Afon Conwy* (Afon「川」は女性単数名詞) のように属格名詞に軟変異のない形が使われているが、方言形・擬古形として *Afon Ddyfrdwy*, *Afon Gonwy* が残っている (Thomas 1996:322 (Nodyn [c]))。この理由は、属格名詞の語頭子音が軟変異を起こすのは、それが形容詞的機能の場合のみ、という考え方があり、同格表現の場合には、明らかに属格名詞の機能は形容詞的ではないからであろうか。

xiv [30] [31] の例は「カムライグ語聖書」からの引用。

xv “In primitive Aryan, ‘the genitive could be employed for the expression of any given relation between two substantives’. In Welsh, though many relations must be expressed by prepositions, the original wide use of the genitive is less restricted than in most modern languages” (Morris-Jones, J. 1931:159) ただし、本引用内の引用部分は、Herman Paul『言語史原理』からのものである:「…インド・ゲルマン語については、まだ古代ギリシャ語に行われているように、二つの名詞の間のあらゆる任意の関係を表すのに用いられていたと主張することが出来る」 Paul (1993:274, §104)。

xvi 「その本を持った男」という意味で、ある人物をその所有物によって限定する場合には、前置詞句や関係節を用いる (*y dyn a chanddo'r llyfr* (a (接続詞) *chanddo* < *gan* (前置詞) 「(彼)と共に」; *y dyn â'r llyfr* (*â* (前置詞) 「~を持った」)。 *y dyn a biau'r llyfr* (a (関係詞) *biau* > *piau* (動詞) 「~を持つ」)。

xvii 「カムライグ語聖書」マタイ 25 章の題目。

xviii 「カムライグ語聖書」。

xix 「カムライグ語聖書」。

xx Morris-Jones, J. は、カムライグ語では「部分属格」関係は、材料の関係 (融合型(A)(6)) の一種として表現していると説明している。Morris-Jones, J. (1931: 163, § 122 (ii))

xxi Jackson (1953/1994: 4-5) に従い、大陸ケルト語がブリテン島に入ってきた当初の言語をブリトニック語 (Brittonic)、その後 6 世紀までの言語 (格変化語尾の脱落以前) をブリティッシュ方言 (Brittish)、6 世紀中頃からカムライグ語の歴史の最初の時代までの言語を初期カムライグ語 (Primitive Cymraeg) とする。

xxii Ball (2002:182-183) は、Jackson (1953) によるカムライグ語発達の要約を次のようにしている。‘... the parent language, Late British (an inflected

language), had been strongly stressed on the penult. When this heavy penultimate stress led to the loss of inflectional suffixes, Welsh was born as a distinct language. This new language had stress on the (newly) final syllable, and had fixed rather than free word order, relying on prepositions and word order to perform the functions of the lost inflections. The loss of final syllables was completed by the middle of the six century'

<sup>xxiii</sup> '...as the transition of a language from the inflectional to the positional stage is an important one, which could not help registering itself in its literature, let us turn our attention for a moment to this point. For our purpose the difference between an inflectional and a positional construction admits of easy illustration, In Latin there is no material difference in meaning between *rex Romae* and *Romae rex*, that is, if we put N. for nominative, and G. for genitive, N.G. and G.N. are admissible in that language, while in Welsh we have to be contented with N.G. only, and say *brenhin Rhufain*, as *Rhufain brenhin* would not convey the same meaning. Probably, however, when Welsh had case-endings, it could have recourse to both N.G. and G.N.; but when the former were discarded one of the latter had to be given up --- that turned out to be N.G. But the sequence of N.G. could not have beaten up the other off the field in a day, and we have to ascertain if any survivals of G.N. occur in the Welsh literature which has come down to our time. A perusal of the poems attributed to the early bards would convince you that such do occur: I will only quote (in modern orthography) a few at random from Skene's *Four Ancient Books of Wales*: --- *cededel noddod*, "the nation's refuge" (ii.p.7); *huan heolydd arfaidd*, "bold as the sun in his course" (ii.p.20); *Cymmerau trin*, "the conflict of Cymmerau" (ii.p.24); and "Gorchan Cynfelyn *cylchny nylad*," "Gorchan Cynfelyn, to make the region weep" (ii.p.93)". Rhys (1877/2002: 159-160)

#### 参考文献

- Ball, M. J. & Fife, J. (eds.) (1992). *The Celtic Languages*, London: Routledge.
- Ball, M. J. (2001). *Welsh Phonetics* (Welsh Studies Volume 17), Lewiston-Queenston-Lampeter: The Edwin Mellen Press.
- BBC Cymru (Canolbarth)
- [http://www.bbc.co.uk/cymru/canolbarth/bywyd\\_bro/pages/geirfa.shtml](http://www.bbc.co.uk/cymru/canolbarth/bywyd_bro/pages/geirfa.shtml)
- Evans, D.S. (1960). *Gramadeg Cymraeg Canol* (ail argraffiad). Caerdydd: Gwasg Prifysgol Cymru.
- Jackson, K. H. (1953/1994). *Language and History in Early Britain. A chronological survey of the Brittonic Languages 1<sup>st</sup> to 12<sup>th</sup> c. A.D.*, Dublin: Four Courts Press.
- Langacker, R. (1991). *Foundations of Cognitive Grammar. Vol. II Descriptive Application*, Stanford: Stanford University Press.

- Morris-Jones, J. (1931). *Welsh Syntax: An Unfinished Draft*, Cardiff: The University of Wales Press Board.
- Morris Jones, B. (1993). 'The definite article and specific reference', *Studia Celtica* 26/27:175-201.
- Rhys, J. (1877/2002). *Lectures on Welsh Philology (The Development of Celtic Linguistics, 1850-1900. vol. 4*, ed. Davies, Daniel R.), London: Routledge.
- Rowlands, E.(1977/78). 'Y Genidol Diffiniol yn Gymraeg', *Studia Celtica* 12/13:291-320.
- Rosenbach, A. (2002). *Genitive Variation in English: Conceptual Factors in Synchronic and Diachronic Studies*, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Thomas, P. W. (1996). *Gramadeg y Gymraeg*, Caerdydd: Gwasg Prifysgol Cymru.
- Paul, H. (1993). 『言語史原理』, (訳: 福本喜之助) 東京: 講談社  
「カムライグ語聖書」
- Y Beible Cymraeg Newydd yn cynnwys Yr Apocryffa*. Swindon: Cymdeithas y Beibl. (1988).